
遊戯王 ～プラネットシリーズと共に～

朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ～プラネットシリーズと共に～

【Nコード】

N4844Z

【作者名】

朱雀

【あらすじ】

引越した友人から貰った謎のカード、The supremacy ひょんなことから、プラネットシリーズを集めることになった主人公 佐藤達也はどのような運命を辿るのだろうか。処女作で不定期更新ですが、温かい目で見守ってあげて下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿で不定期更新ですが、よろしく願います。

プロローグ

プロローグ

??? side

「本当に行っちゃうんだな。智則。」

「ああ、できれば卒業までは一緒に居たかったな。達也。」

そろそろ、日が沈みそうな時間に二人の少年は向かい合う。

「そうだ、俺が引越す前にこのカードをあげようと思ってたんだ。受け取ってくれ。」

「? ああ。わかった、じゃあな。また会おうぜ。」

立ち去ろうとする親友に手をふりながら、俺はそのカードをみる。

The supremacy SUN

俺の見たことのないカードだ。家に帰ろうとした時、何かの声が聞こえたが俺はそのまま家に帰った。

〳〵家〳〵

机の前でまた、貰ったカードをまじまじと見る。イラストは男の顔をした悪魔の後ろに黒い太陽があるような感じだ。このカードを貰

ってから、度々何かの声が聞こえるが何なのだろう。

「まあ、考えても仕方ないか。」

・・・お前は私を使いこなせるか。・・・

「え？」

また、声がきこえた。

・・・フッフ、やっと声がきこえたな。・・・

「っ！　だれだ、おまえは！」

声の主もわからぬまま、自分の頭に響いてくる声に俺は戦慄する。

・・・しかし、おまえが私を持ち、プラネットシリーズを集めるのに適しているかを調べるものが必要だな。・・・

何を言っているんだ？　そして、俺の頭に直接響いていることも気になる。

・・・さあ、デュエルを始めよう。・・・

俺の目の前に、俺が今まで見たことも無かった黒いデュエルフィールドが広がり、俺が持っていたThe SUNのイラストから悪魔が消え、目の前に立っていた。

「くっ！」

俺は本能的にデュエルディスクを構え、The SUNの手にもデュエルディスクができていた。

「「決闘!!」」

達也 vs SUN 1 (前書き)

いきなりSUNとのデュエルです。

達也 vs SUN 1

……まずは私のターンからだ。……

……ドロー。私はモンスターを一体伏せ、カードを二枚セット。ターンエンドだ。……

「俺のターン。ドロー。」

SUNのデッキがわからない今、まずは様子見からだろう。

「俺は、ダーク・グレファアを召喚。さらに、ダーク・グレファアの効果発動。手札の堕天使ゼラートを捨て、デッキから堕天使スペルビアを墓地へ送る。いくぞ、バトル！ ダーク・グレファアでセットモンスターに攻撃！」

ダーク・グレファアがセットモンスターを切りつける。

グレイブ・スクワーマー

……グレイブ・スクワーマーの効果発動。ダーク・グレファアを破壊する。……

地面から、グレイブ・スクワーマーが出てきて、ダーク・グレファアを道ずれにしていく。正直、気持ちが悪くなる光景だ。

「俺はカードを二枚セットしターンエンド。」

……まで。エンドフェイズ時に、魔法発動。終焉の焰。黒焰

トークン二体を特殊召喚する。・・・

これは、まずい。黒焰トークンは、闇属性モンスターのアドバンス召喚に使用できる。そして、SUNは闇属性。次のターンにはSUNが出るかもしれない。俺のセットカードでどうにかなるのか？

達也

8000 手札二枚

ダーク・グレファアー セットカード二枚

SUN

8000 手札三枚

黒炎トークン二体 セットカード一枚

・・・私のターン。ドロ。私は黒焰トークン二体をリリースし、The supremacy SUN、つまり、私を召喚。・・・

ちっ、やはりきたか。

・・・バトル。SUNでダーク・グレファアーを攻撃。・・・

黒い光線がダーク・グレファアーへ発射される。

たしか、さっき見たときSUNの効果は、破壊され墓地へ送られた次のスタンバイフェイズ時に手札を一枚捨て、墓地から特殊召喚だ

った気がする。ならば、除外すればいいだけだ！

「罨発動！次元幽閉！SUNをゲームから除外する！」

・・・甘いぞ。罨発動。王宮の鉄壁。カードはゲームから除外されなくなる。・・・

まずい。SUNの一番の弱点、除外が封じられてしまった。たしかに、蘇生効果も特殊召喚で奈落の落とし穴などにかかりやすいため、除外対策は必須だろう。そして、ダーク・グレファアが光線に飲み込まれ破壊されてしまった。スペルビアを落とせばいいとはいえ、モンスターがいなくなってしまった。

・・・私は二重召喚を発動。さらに、私はモンスターを一体セツトし、ターンエンドだ。・・・

二重召喚は一ターンに二度の通常召喚を行うカードだ。あの、セツトモンスターは何だろう？ また、グレイブ・スクワマーのような除去モンスターなら、次のターン、俺は3000のダメージを受けてしまうかもしれない。

「俺のターン。ドロー。」

悪くない。堕天使アスモディウスだ。

「俺は、手札からヘカテリスを捨て、デッキから神の居城ーヴァルハラを手札に加え、そのまま発動。さらに、神の居城ーヴァルハラの効果で堕天使アスモディウスを特殊召喚。堕天使アスモディウスの効果を発動し、アテナを墓地へ送る。バトル！堕天使アスモディウスでセツトモンスターに攻撃！」

墮天使アスモディウスの翼がセットモンスターを切り裂く。

ライトロード・ハンター ライコウ

・・・・ライコウの効果により、神の居城ーヴァルハラを破壊。
さらに、自分のデッキの上からカードを三枚墓地におくる。・・・

墮天使アスモディウスを破壊しなかったのは、それよりも天使を特殊召喚する神の居城ーヴァルハラを破壊しておくべきだと思ったのだろう。墮天使アスモディウスはあとで相打ちし、自分だけ復活すればいいし。

「俺はターンエンド。」

達也

6700 手札一枚

墮天使アスモディウス セットカード二枚

SUN

8000 手札一枚

SUN 王宮の鉄壁

・・・・私のターン。ドロー。・・・

さあ、このターン、どう動く？

達也 v s S U N 1 (後書き)

どうでしたか？

ライフポイント8000のデュエルは長いですね。

達也 v s S U N 2 (前書き)

S U Nとのデュエルの続きです。汎用カード使いすぎですね、すいません。まあ、どう考えても、あるカードの下位互換になるカードは使いませんけど。

達也 vs SUN 2

「……私は、カードガンナーを召喚し、効果発動。デッキの上から三枚墓地へ送り攻撃力が1900になる。バトルフェイズ。SUNで堕天使アスモディウスに攻撃。……」

SUNの黒い光線と堕天使アスモディウスの翼がぶつかり合い、お互いにフィールドから消える。

SUNはいなくなったが、地面からSUNの威圧感が感じられる。

「だが、ここで堕天使アスモディウスの効果発動！ アスモトークンとディウストークンを守備表示で特殊召喚する。アスモトークンは効果で破壊されず、ディウストークンは戦闘で破壊されない！」

堕天使アスモディウスのミニチュアのような赤と青のトークンがフィールドに出てきた。

よし、アスモトークンはカードガンナーに破壊されるだろうが、ディウストークンは戦闘破壊されないため、SUNの攻撃をしのげる！

「……ならば、カードガンナーでアスモトークンに攻撃。さらに、魔法発動。ブラックホール。カードガンナーとディウストークンを破壊する。……」

「なんだって？」

「……カードガンナーが破壊された場合、デッキからカードを一枚ドローする。私はこれでターンエンド。……」

「俺のターン。ドロ。」

・・・スタンバイフェイズ時、手札を一枚捨てSUNを特殊召喚する。・・・

今引いたカードは死者蘇生。そして、セットカードはリビングデッドの呼び声。勝てる！ 本当は前のターンにも大ダメージを与えることができたのだが、ゴーズが怖かった。ゴーズを出されるとあの状況ではなにもできないからな。案の定、今SUNは最初から持っていたであろうゴーズを捨て、SUNを特殊召喚した。でも、これでもう怖いものはない。

「俺はリビングデッドの呼び声を発動。墓地から、堕天使スペルビアを特殊召喚。さらに堕天使スペルビアの効果発動、墓地から堕天使ゼラートを特殊召喚。堕天使ゼラートの効果発動、手札を一枚捨て、相手

フィールドのモンスター全てを破壊する。」

・・・ぐっ・・・

「さらに、死者蘇生発動。SUNを自分フィールド上に特殊召喚する。」

禍々しい悪魔が自分の目の前に出てくる。

・・・ほう。これで全てのモンスターでダイレクトアタックすれば、お前の勝ちか。・・・

「ああ。これでどうだ？」

黒いフィールドが消え、俺はいつもの机の前に戻っていた。

達也 v s S U N 2 (後書き)

いかがでしたか。お気に入り登録して下さい皆さん、ありがとうございます。

プラネットシリーズとは!?(前書き)

今回はデュエルありません。プラネットシリーズ誰に持たせるか迷います。

プラネットシリーズとは!?

・・・・これほどの実力か……。なるほど、いいだろう。・・・

「お前は何が目的なんだ？」

・・・・私の目的は、世界に散らばってしまった、プラネットシリーズを全て集めること。・・・

「プラネットシリーズ？」

・・・・プラネットシリーズは本来この世界には存在しなかった。しかし、何者かの力によって新たな12個の異世界が生まれ、その世界達とこの世界がぶつかったことにより、その世界にあったプラネットシリーズの一部がこの世界にやってきてしまったのだ。まあ、こう言う私もプラネットシリーズの一枚だがな・・・

あれ、でも……

「たしか、太陽って、惑星じゃないよな？ 恒星だよな？」

・・・・気にするな。おそらく私を作った人がバカだったか、その世界では太陽は惑星だったのだろう。・・・

バカって……。しかも、太陽が惑星だったら、その世界昼無いじゃんかよ、どうすんだよ……。

・・・・話が変わったな、では、お前は どうする？ プラネットシ

リーズを集めるか?.....

威圧感が増した。こえええええ。

「断ったら?」

.....お前の心の闇を増幅させ、さらに、マインドクラッシュする。.....

心の闇ってあれか、アニメでは全編通して語られてるヤツ。何度もラスボスになってるもんなあ。そして、マインドクラッシュ。これは、社長がやられたやつか。うっわ、やば、つか拒否権ないじゃんもうこれ。

「じゃ、じゃあ、何でおれなんだ?」

.....それは、お前がカードの精霊の声を聞ける、数少ない人物だからだ。現に、お前にこのカードを渡した少年は、私の声が聞こえなかっただろう?もし、聞こえていたならば、お前にこれほどまでに危険なカードを渡しはしなかっただろう。.....

.....危険っていう自覚あったのかよ。

.....さらに、お前は私に勝った。こうなると、もうこの世界でプラネットシリーズを集められる人に会う機会はもう無いかもしれない。だから、私はお前に言っているのだ。.....

「まあ、智則に貰ったカードだし.....。引き受けるとして、どうやってそのプラネットシリーズを集めるんだ?」

・・・デュエルをすればわかる。・・・

「どういうことだ？」

・・・さつき、お前とデュエルした時に展開された黒いフィールド……。あれは本来、プラネットシリーズ同士のデュエルで展開されるフィールドだ。プラネットシリーズをどちらかのプレイヤーが・・・

「つまり、プラネットシリーズとのデュエルの時は自ずから分かってことか？」

……そんなにたくさんの人とデュエルしないといけないのかよ。随分大変なことだ。

・・・さらに、デュエルに勝てばそのプラネットシリーズは前の手元にくる。強引な手段を使わなくてもよい。・・・

まあ、そうじゃなきゃなあ……。

・・・どうする？・・・

「いいぜ。プラネットシリーズ集めるの手伝ってやる。」

・・・わかった。急がなくてもよいぞ。・・・

さあ、今日は新しいデッキでも創るかな。

――― 次の日 ―――

8..10

「やばい、昨日1時までデッキ組んでたから……。遅刻だあゝゝ！」

授業は8..30に始まる。俺はデッキは持っていくが、教科書などを碌に持っていったいないという、何がしたいんだかわからない状態で家を飛び出していった。

8..25

「間に……。あつた……。」

起きてから学校に来るのにいつもは30分かかる。それなのに、今日は15分で来れたというのだから、いつもがどんなにだらけているのが分かる。

「おお、達也く。どうした、こんなギリギリに。」

話かけてきたコイツは竹下 辰哉。よく一緒にデュエルする仲間だ。でも、同じ名前の読みで趣味も同じデュエルだから、間違いやすい。

「じゃあ、早速デュエルしようぜ。」

はあ？ 残り5分だぞ？

「いやさ、俺、昨日新しいデッキ創ったんだよ。」

俺と同じじゃないか。だから紛らわしいんだよ、コイツは。

「デュエル！」

「え？」

気づくとデュエルフィールドが展開されていた。

「「がんばれよ〜」」

皆もノッてはやしたてる。

「アンタたちもバカねえ。」

こういう、コイツは大林 あかり。小学校からの友達だ。

「お前には、バカって言われたくない！おまえ一回も成績で勝ったことないだろ！」

「うっさいわね！時間ないわよ！」

「ちっ。デュエル！」

宣言が遅れたが、デュエルが開始した。

プラネットシリーズとは！？（後書き）

プラネットシリーズお互い一枚しか入ってないはずなのに、プラネットシリーズをどちらかが出さないと駄目だという……。見苦しいかもしれません。

虫の恐怖！（前書き）

なんか、タイトルでいろいろネタバレしてそうです。

虫の恐怖！

「まずは、俺のターン。ドロー。」

この手札なら……。

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ。」

俺が伏せたカードは神の警告。大抵のモンスターならこれで止められる。

「俺のターン。ドロー。」

辰哉の口元が笑ったように見える。どういうデッキなんだ？

「俺は手札から、サイクロン発動！達也のセットカードを破壊する！さらに、手札から魔法発動。おろかな埋葬。デッキから昆虫装機ホーネットを墓地に送る。」

昆虫装機か！ORDER OF CHAOSで登場したカテゴリ。毎ターン4ずつアドバンテージをとっていたり、ソリティアをしたりすることで有名な凶悪デッキ。辰哉のデッキがソリティア型なら、口元が笑ったことからこのターンに1ターンキルされるかもしれない。

「俺は、昆虫装機ダンセルを召喚。さらに、ダンセルの効果発動、墓地からホーネットを装備カード扱いとして装備する。さらに、手札から甲虫装機ギガマンティスをダンセルに装備する。ギガマンティスを装備したダンセルの攻撃力は2400となる。」

……それで、ホーネットの効果でギガマンティスを破壊して、モンスターを大量展開し、また装備の繰り返しか。もう説明聞くの嫌なんだが。

「ホーネットの効果発動！このカードを墓地へ送り、フィールド上のカードを一枚破壊する！俺は、ギガマンティスを破壊！」

なぜ、自分のカードを破壊したのかというと、ダンセルには装備されたカードが墓地へ送られた時、デッキから甲虫装機を特殊召喚する効果があるからだ。この場合墓地へ送られたカードは二枚のため、二体の甲虫装機を特殊召喚できる。

「さらに、ダンセルの効果によりデッキからもう一体のダンセルと甲虫装機センチピードを特殊召喚する！今特殊召喚したダンセルの効果を発動し、ギガマンティスを装備、センチピードの効果を発動し、ホーネットを装備する！」

WOW！まあ、こうなるよな……。

「ギガマンティスを装備したダンセルの攻撃力は2400！手札から、このダンセルに明鏡止水の心を装備！明鏡止水の心は装備モンスターへの攻撃力が1300以上の場合、破壊される！」

明鏡止水の心まで手札に持ってたのかよ。

「ダンセルの効果により、デッキからギガマンティスを特殊召喚する。そして、ホーネットの効果により、装備カード状態のギガマンティスを破壊する。ダンセルの効果により、デッキからギガマンティスを特殊召喚し、センチピードの効果により、デッキからダンセル

ルを手札に加える。」

センチピードの効果は装備カードが墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機を手札に加えることができる。

……あれ？俺、さっきからずっと見てるだけの気がするけどいいのかな？大丈夫なのかな？

そんな心配をしているうちに、周りがざわついていることに気づいた。ん？攻撃力の合計は……？

ダンセル1000+センチピード1600+ダンセル1000+ギ
ガマンティス2400+ギガマンティス2400=8400

……やばい。

「いくぞ、全員でダイレク………あれ？先生どうしたんですか？」

「……おまえら……。全員席に着け。」

その後、俺らが50分ずっと怒られたことは言うまでもない。

——学校終了——

「じゃあ、これからいつものな。」

「ああ。」

いつもの、というのは俺達がいつも学校が終わったら行っているカードショップのことだ。

「ふう、アンタたちのせいで今日も怒られたじゃない……。」

「お前だってはやしたてただろ。」

「辰哉に1ターンキルされそうになったのにそんな偉そうなこと言えるの???」

「……くそっ! あれは、辰哉が1キルデッキだと思わなかったからだよ、それに、俺の手札に冥府の使者 ゴーズがいたらどうすんだよ。」

「一番最初にゴーズのことを言わなかったのは、ゴーズは手札ありませんでしたと言っているようなものよ。じゃあ、わたしはここでまた後でね〜。」

最後のフワフワさせた声が気に障る。

・・・達也。・・・

「ん？ああ、SUNか。どうした。プラネットシリーズ使いでも見つけたか？」

・・・そうだ。・・・

「マジで!？」

早っ！

「で、だれだ？」

・・・お前が今日デュエルをした竹下辰哉という奴だ。・・・

「えっ……。」

・・・お前はこれからそいつと会うのだろう。人のいない場所に呼び出し、デュエルしろ。・・・

「ちょっと待ってって！どうして分かった？」

・・・そいつが男に怒られた時、デッキを落としただろう。その時、プラネットシリーズが見えた。The tripping MERCURYというカードだ。あれはあまり強くない。手始めにちよいどいいだろう。・・・

「The tripping MERCURYか……。……わかった。」

——カードショップ——

「よっ！達也！」

「まだ、あかりは来てないか……。」

「どうした？」

「いや、なんでもない。なあ、お前、プラネットシリーズって知っ

てるか？」

できれば、SUNの言葉が嘘であってほしい。そんな言葉だった。

「ん？このことか？」

そうやって差し出してきたのは、The tripping ME
RCURY

「そうか、わかった、ここじゃなんだしちよつとあっちでデュエルしようぜ。」

「えっ、ちよつ、いつもはここで……」

「なあ、SUN本当にデュエルしないといけないのか？」

「……なぜ、そう沈んでいる？プラネットシリーズを持っているからといっても、精霊の声が聞こえなければプラネットシリーズを集めることはないだろう。それに、持っているからといって悪い人間になるわけでもない。……」

「っ！そうか。そうだよな。」

勘違いをしていたみたいだ。NOや闇のカードとかのことを考えすぎていた。

「なあ辰哉。俺、今プラネットシリーズを集めているんだ。だから、

俺が勝ったらそのカード譲ってくれないか？俺もプラネットシリーズ持ってるから、俺が負けたらそれをあげるよ。」

・・・おい、待て。プラネットシリーズを持っているなどとプラネットシリーズの前で言ったら警戒するのが当たり前だろう！・

「えっ？」

気づけば、辰哉のまわりに黒いオーラができている。

「やばい！」

デュエルだ！The tripping MERCURY！

虫の恐怖！（後書き）

昆虫装機強いですね。僕の友達にも使っている人がいます。何回か召喚を止められれば勝てるのですが……。

初のプラネットシリーズを賭けたデュエル！（前書き）

なにかが違う……

初のプラネットシリーズを賭けたデュエル！

「……奴のまわりの黒いオーラ……。すでに、自我を失っている、MERCURYのものになっているだろうな……。……」

「くそっ！俺が引き起こしたとは言え、危ないカードじゃないかよ！」

「達也……。始めよう……。」

「「決闘！！」」

「私のターン……。ドロー。」

辰哉のデッキは、朝と同じ昆虫装機のはず。俺のデッキの相性は普通だ。

「私は終末の騎士を召喚……。デッキから、昆虫装機ホーネットを墓地へ送る。そして、カードを4枚セットしてターンエンドだ。」

4枚のセットカード！？辰哉、家で急いでデッキタイプを変えたな！？おそらく、スターライト・ロードでも伏せてあるのだろうか……。でも、使うか。

「俺のターン。ドロー。手札から魔法発動。大嵐。全ての魔法・罠を破壊する！」

「チェーンして罠発動……。スターライト・ロード。大嵐を無効にし、エクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する。」

」

やっぱりあった……。そして、白銀に光る輝かしい竜が特殊召喚される。

「まだだ！さらに、魔法発動。サイクロン。一番右のセットカードを破壊する！」

奈落の落とし穴

危ない危ない。

「モンスター一体をセットして、カードを二枚伏せる。ターンエンド。」

辰哉（MERCURY）

8000 手札一枚

終末の騎士 スターダスト・ドラゴン セットカード二枚

達也

8000 手札一枚

セットモンスター一体 セットカード二枚

「私のターン……。ドロー。」

お互い最初のターンで手札をかなり消費している。動いて止められたらそのターンは終わりだろう。

「私は、昆虫装機センチピードを召喚、そして効果発「ちよつと待った！罨発動。奈落の落とし穴。センチピードを除外する！」……そうか、ならば、スターダスト・ドラゴンでセットモンスターに攻撃。」

スターダスト・ドラゴンの口から、吐き出された白い光線がセットモンスターを貫く。

ヴェルズ・フレイス

「だが、ヴェルズ・フレイスの効果は発動する。スターダスト・ドラゴンを手札に、つまり、エクストラデッキに戻す！」

「私は終末の騎士でダイレクトアタック……。」

今度は騎士が、剣を俺に刺してきた。

「……ぐっ！」

「私はこれでターンエンド……。」

ライフポイントの差は1400だけ。次のターンで出させて貰うぜ。

「待った！エンドフェイズ時に魔法発動。終焉の焰。黒焰トークン二体を特殊召喚！」

「そして、俺のターン。ドロ。」

おそらく、残りのセットカードの内、一枚はブラフとみていいだろう。警戒すべきはもう一枚か。

「俺は二体の黒焰トークンをリリースし、現れよ、The supply
remasy SUN!!!!」

太陽が影に隠れ、その中から禍々しい悪魔が降臨する。デュエルディスクの演出とはいえ、凄いものは凄い。さらに、俺がSUNを出したことに共鳴するように辰哉のデュエルディスクが光だし、SUNとデュエルした時にも出た、黒いフィールドが展開された。

・・・・フフフフ・・・・

あれは、MERCURYの声か？まあ、いい。デュエルで勝てば分かることだ！

「俺は、SUNで終末の騎士に攻撃！」

ダーク・グレファアーや、堕天使アスモディウスを飲み込んだ黒い光線が今度は、終末の騎士へ向けて発射される。

「畏発動……。魔法の筒。攻撃を無効にし、攻撃力分のダメージを相手に与える。」

「何だって!？」

SUNの攻撃力は3000。つまり、3000ポイントの大ダメージを俺は受けることになる。

SUNの黒い光線が筒の中に入り、今度は俺にとんでくる。

「っ!!!」

気付いた時には、俺は壁に叩き付けられていた。

「くそっ……。俺はカードを一枚セットしてターンエンド。」

辰哉（MERCURY）

8000 手札一枚

終末の騎士 セットカード一枚

達也

3600 手札無し

SUN セットカード一枚

「私のターン……。ドロー。」

「私はリビングデッドの呼び声を発動……。墓地からホーネットを特殊召喚する。さらに、レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、手札からTGWーウルフを特殊召喚。」

TG！？まさか、まだ代行天使は見えていないが、あれはTG代行インゼクターなのか？

「私はこの三体をリリースし……。降臨せよ！The tripping MERCURY!!!!」

初のプラネットシリーズを賭けたデュエル！（後書き）

結構時間がかかりました。主人公のデッキは今回はヴェルズでしたが、手札が少ないため、次回も活躍できそうにありません。でも、活躍する機会はつくります！

後、すいません。ヴェルズには終焉の焰なんて入らないと思うんですけど、SUNを一枚でだせて、しかも、攻撃も防げて、ゾンビキヤリアとシンクロもできるから、とさまざまな理由をつけて入れました。

そして、問題の魔法の筒ですね。今はバーンデッキぐらいでしか採用されてないという……。言い訳はしません、いや、できません。しかも、TG代行インゼクターがかなり事故ってます。

The tripping MERCURY (前書き)

MERCURY戦の続きです。

The tripping MERCURY

MERCURY召喚の宣言と共に、フィールドに二つの剣を持つ、虫の女王が現れた。

The tripping MERCURY
レベル8 攻撃力2000／守備力2000

「MERCURYの効果発動……。MERCURYはアドバンス召喚に使用したモンスターの数によって、効果が変わる。」

リリースしたモンスターは三体。二体リリースより強力な効果なのだろう。

「三対リリースの場合、このモンスター以外のモンスターの攻撃力は0になる……。」

「っ！」

「私はこれでターンエンド……。」

MERCURYで攻撃しなかったのは、攻撃すれば、次のターンSUNは復活しMERCURYはそのまま戦闘破壊される。しかし、攻撃しなければSUNの攻撃力は0のまま、3000に戻すためにはSUNから攻撃しなければならず、攻撃される回数が一回減るからだろう。

「俺のターン。ドロ。」

っ！これなら、賭けにできる！成功確率は50%ぐらいか。ダンセルとセンチピードさえ引かれなければ……

「俺は、SUNを守備表示に変更。ターンエンドだ。」

辰哉(MERCURY)

8000 手札無し

MERCURY リビングデッドの呼び声

達也

3600 手札一枚

SUN

「この程度か……。私のターン……。ドロ。」

「ほう……。私はMERCURYを守備表示にしてターンエンド。」

よしっ！いける！

「俺のターン！ドロ！」

「俺はレスキューラビットを召喚！レスキューラビットの効果発動、デッキからヴェルズ・ヘリオロップ二体を特殊召喚！」

「二体の同じレベルのモンスターか……。」

「二体のヴェルズ・ヘリオロップでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！ヴェルズ・バハムート！」

氷結界の龍ブリューナクを闇化させたようなモンスターが召喚される。

「ヴェルズ・バハムートの効果発動！エクシーズ素材ひとつを取り除き、手札のヴェルズ一枚捨てることにより、相手フィールド上の表側表示モンスター一体のコントロールを得る！俺はヴェルズ・マンドラゴを捨て、MERCURYを選択！」

「何っ……！」

MERCURYがSUNの援護もあって、俺のフィールドに来る。すると、辰哉に付いていた黒いオーラが消え、SUNに吸収された。

「……？あれっ？達也、どうしてこんな所でデュエルしてるんだよ？」

流石に、「辰哉はカードにとりつかれていたんだっ……！」なんて言うに変な目で見られることは確定なので、適当に誤魔化しておく。プラネットシリーズを賭けたことは忘れずに言ったが。

「ふーん。まあ、いいか。負けそうだけど、そのカードの使い道分かんなかったし。」

「じゃ、続けるぜ。MERCURYとバハムートで、辰哉にダイレクトアタック！」

MERCURYはその二つの剣で、バハムートは氷の混じった黒いビームで辰哉に攻撃した。

「俺は、ターンエンドだ。」

とりあえずは安心だ。

辰哉

3650 手札一枚

フィールド無し

達也

3600 手札無し

SUN バハムート MERCURY

「俺のターン！ドロー！ちえっ、サレンダーだ。手札がマスター・ヒュペリオンとサイクロンじゃ勝てないよ。」

ふう、勝てた。

あの後、あかりが来て他の人とかとも何度かデュエルした。5勝2敗。2敗は、インゼクターだった。

「なあ、SUN。お前は、MERCURYが弱いと言っていたけど、結構危なかったんじゃないか？」

MERCURYが騒いでる気がしたが、既にカードファイルの中なので聞こえない。つか、MERCURYって女だったんだな、辰哉の変った口調が印象に残りすぎて、男だと思っていた。もう話す機会はないだろうが。

・・・そうだな、だがこれで一枚集まったのは事実だ。この調子で、とでも言っておこう。・・・

辰哉が、プラネットシリーズに……。これほどまでに負けるのが怖かったデュエルは無かった。アニメのUMAはいつも、「デュエルは楽しいものだろ！」と言っていたのに。

プラネットシリーズが惑星の数だけあるとすれば、残り7枚。身近にもいるかもしれない。俺はどんな運命を辿るんだろう。

今日は一日中それを考えていた。

The tripping MERCURY (後書き)

やっと、SUNを除く一枚目のプラネットシリーズが……！でも、MERCURYははっきり言う弱いです。なので、これから使うか分かりません。

OCG化されてないプラネットシリーズのステータスは作品上に載せることにしました。効果はその後、キャラクターが言うので載せてません。

地区大会（前書き）

タイトルが「地区大会」でありながら、今回はデュエル無しです。

地区大会

———? ? ?———

?? ? side

「昨日、見たこともないカードを使った奴がいたと話していた奴がいたよ。惑星がなんかとか言ってたから、プラネットシリーズかもね。」

「そうですか。試しに行くのですか？」

「ああ、プラネットシリーズを集めれば〇〇〇が起こることがわかったしね。咲も試してみれば？」

「私はその人のデュエルを見てからにします。あまり危険なことはしないで下さいよ。」

「わかってるさ。」

———次の日、学校にて———

達也 side

とりあえず、事情説明だ。

俺は今、学校にいる。で、なぜ事情説明をしなければいけないのか。その理由は、なぜか、俺の席の後ろでSUNとMERCURYが授業を聞いているからだ。いや、おかしいだろ！

もうちょっと、映えるモンスターならいいとして、ごっついモンスター二体が後ろについてくるとか絶望だ。

しかも時々、……彼は、剣闘獣デッキのようだ。デュエルしてみたらどうだ？……とか言ってきた。俺は十代や遊馬みたいなデュエルバカじゃないんだよ！あゝあ、ハネクリボートかがよかったなあ。

そんな事を考えていると、あかりが話かけてきた。

「ねえ、今日は地区大会でしょ。皆も出るんだから、急がないと！」

……忘れていた。地区大会とは、いくつかの学校ごとに行われている、遊戯王の大会だ。1年に一回行われている。

ここでも、遊戯王はデュエルアカデミアが造られるほどではないけれど、学校の半分くらいの人がやっているのだから、当たり前だ。

「うん……、忘れてた。」

「大会を忘れるなんて……。早く行きましょよ。」

―――大会後―――

俺の結果は8位だった。墮天使で出たのだが、準々決勝でミラーマッチになり、先に大天使クリスティアを出されて負けてしまった。4位以内に入れば市大会に出れたのだが……。もうちょっと改良が必要だな。

因みに辰哉は2位で市大会進出が決定し、あかりは32位だった。まあ、大会参加人数は400人ぐらいだったから、皆良い結果を取ったと言えるのだが、

「よっしゃ、市大会進出！」

さっつきからずっとうろ言っているのが、ウザい。

「はあ〜。いいなあ〜市大会。あたし、一回も出た事が無いし…。」

…あかりのデッキはクリボーデッキだ。つまり、機雷化や増殖で頑張るデッキなのだが、世間一般ではファンデッキと呼ばれている。それを、クリボーかわいいなどという理由で作るのは凄いなと思う。しかも、結構勝ってるし。

「辰哉、市大会っていつだったっけ？」

「え？一週間後だけど？」

「ふーん。わかった見に行くよ。」

「応援よろしく〜」

あと一回デュエルに勝てれば、市大会に出れて、たくさんの人が見ている中でコイツを無残にぶつつぶせたかもしれないのに……。

「っ！あたし、ちょっと学校に忘れ物してきちゃった！なんで、大会の時気付かなかったんだろ？」

「じゃあ、取ってこいよ。」

「それだけ？取ってきてくれてもいいんじゃないの？」

「「いや、それはない。」」

当たり前だ。だれがパシリになるか。

「……じゃあ、あたしはここで。」

その後、辰哉とも別れ家に入ろうとしたところ、家の前に一人の少女がいた。

「あの……うちに何か用ですか？」

「あの、佐藤達也さんって方はいらっしゃいますか？」

「えっと……俺ですけど。」

「っ！そうですか。あの、デュエルしませんか？大会で見たんですけど、それでデュエルしたくなって！」

「いいですけど……あの誰ですか？」

「あつ、私は永澤咲っています。あの、できれば、The supremacy SUNってカード見せて貰えますか？」

俺は大会中にSUNを引けば、プラネットシリーズを集めるためとか、死皇帝の陵墓で出しやすいことから、SUNを召喚してしまっている。地区大会では、会場には係の人がいるものの、それぞれのデュエルに審判はいない。デュエルディスクでも全て判定できるからだ。流石に都大会とかになると観客も増えるし審判もいるけどね。

触らせるのは拙いかもしれないけど、見せるだけならいいだろう。

「このカードだよ。」

「……やめろ!!! 見せるな!!!」

「?なんでだ?それにもう見せてしまった。」

「……ちっ……」

「ふふふ、姿はみせなくても声だって聞こえるんですよ?」

「なんの事を……まさか!」

「お察しの通りです。私には精霊が見えるんですよ。まあ、あなたもそうですが。私、プラネットシリーズも持ってるんですよ。どうします?デュエルしますか?」

「プラネットシリーズを相手が持っている以上、デュエルするしかない。今逃げても、状況が悪いときにもう一度挑まれるだけだ。その時は逃げられないかもしれない。」

「……わかった。やろう。」

「お互いにデュエルディスクを構える。」

「「決闘!!!」」

地区大会（後書き）

SUNが見える人がはやくも登場しました。

永澤 咲さんが何をしていたか、ですが、彼女は今回の地区大会には出ず、プラネットシリーズを使っている人がいないかを探していました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844z/>

遊戯王 ～プラネットシリーズと共に～

2011年12月20日23時52分発行